

## 編集室にて

### 谷川 清 隆

〈国立天文台理論天文学研究部 〒181-8588 三鷹市大沢 2-21-1〉

e-mail: tanikawa.ky@nao.ac.jp



### 新 人

そこのドアの陰に立っている人、あなたはどなたですか？ ここは秘密の場所ではないから、入るなら入る、通り過ぎるなら通り過ぎる、どちらかにしてください。「今日から編集委員になれと言われて来ました」。どなたですか。「谷川です」。そういえば、委員が一人長期海外出張で出られなくなるから、谷川さんが代理で委員になると庶務理事から聞きました。あなたが谷川さんですか、お入りください。今日は編集委員会です。それを知っていて、来たんですよ。「はい」。じゃあ、そこの空いている席に座ってください。ほかの委員の方を紹介しましょう。こちらから、半田利弘さん、堂谷忠靖さん、奥村幸子さん、一本 潔さんです。わたしは佐藤修二です。

こんなやりとりがあったのかなかったのか、ピンチヒッターとしておそろおそろ天文月報の編集委員の仕事始めた。1992年6月号から1993年7月号までである。それ以前には編集の仕事をしたことはない。1993年8月号から1995年7月号までは編集長を務めた。その後は、国立天文台出版委員を何年かやり、やはり年長であるという理由で2000年4月から2006年3月まで6年間、委員長をやった。その経験が買われて、2005年3月からは、天文学会百年史編纂委員のひとりに指名された。今では、委員会に出席すると、ああでもないこうでもないとしゃべりまくっている。

わたしが月報編集委員をしていた期間は、どうやら、月報の誌面改定の大きな流れの中にあっ

ようだ。改定の大方針は、卓上印刷 (Desk Top Publishing) に向かうものであった。わかりやすく言えば、電子化である。原稿を電子的に受け取って、それを自分たちの責任で割り付けて版を組み、印刷だけ外に依頼する。改定の一つとして、天文月報の紙面は1992年1月号から刷新され、1ページの字数は30%減って、字が大きくなり読みやすくなった。カラー印刷になった。また、欄に名前がつき、目当ての記事を探しやすくなった。これはそれ以前の号と比較してみてもわかることである。わが委員会の任期後半には、誌面の割り付けもパソコンで試験的に行った。誌面がスカスカで紙の無駄遣いであり、カラーにしたことで、不必要なところに色を使っていると苦情が寄せられたこともあった。が、今日まで15年も続いていることを考えれば、この紙面変更はおおむね好評であったのではなかろうか？ 改定の全体像については、半田利弘氏がよく知っているので、いずれそれについて書いてもらおうのいいだろう。わたしは、個々の場面に对应していただけのような気がする。

以下では、自分の経験に基づく話題を二つ取り上げ、読者諸氏の天文月報への興味を喚起したい。また、Skylight記事が10年前に比べて少ないことを指摘する。

### 編集者と投稿者

編集委員の役割の重要なものは、記事を集めることであった。投稿が多ければ次号に回す。けれどもそんなことはめったにない。これが当時の普

通の状況であった。

この投稿記事についてはどう考えますか。担当はどなたでしたっけ。田代 信さんでしたか、それとも中川貴雄さんでしたか。「わたしです」濱部勝さんですか。で、どうですか。「いやあ困りました。内容が過激ですね。没にするかどうか」何か意見がありそうですね、半田利弘さん。「全員が読んでいるわけではないので議論になりません、次回までに各委員が目を通してきて意見を述べるというのはどうですか？」そうしましょう。

一つを除いて議題は済みました。前回の積み残しの投稿記事について議論しましょう。坂尾太郎さんどうですか。「どこか納得できないものを感じるのですが、どことも言えなくて困っています」林 左絵子さんは？「わたしに少し関係がある部分で気になる点があります。『失敗の原因はここにある、とみんなが言っている』と著者は書いています。自分の主張を『みんな』の陰に隠れて責任逃れの形で述べていると思いました」なるほど。では、『……原因はここにある、とわたしは考える』という表現に変えるように勧告しましょう。それで採用ということにしましょう。

余談になるが、それ以後、「みんなが言っているよ」という言葉を聞くと、反射的に「みんな」って誰と誰ですか、と聞く習慣がついた。自分のまわりの数人が「みんな」であることが多い。その後、欧州のある研究者に聞いてみたところ、「みんなが言っている」を同じようなニュアンスで使うことがあるとのことであった。

さて、編集者の仕事として、記事の水準をある程度一定に保つこと、そのために、文章にも干渉することがあるだろうし、過激な表現や、禁止用語をチェックしたりする。修正要求を出し、ときには掲載拒否することも仕事である。上でやったことは編集作業の範囲におさまることだろうか、それとも編集委員の趣味を押しつけたことになるのだろうか。編集者は投稿者に対して気軽に高圧的になれる。投稿者は悔しい思いをするかもしれ

ない。

編集長「谷川さんの投稿記事『天文学者は歴史を書く』はどうですか？」

担当委員「『天文月報××年〇〇号の某氏らの記事を読んだ』で始まるんですが、著者らの意図を読み違えていませんか」

委員 B「わたしも『某氏らの記事』の『おわりに』を読みましたが。違和感もちませんでした。谷川さんの読み方は過敏じゃないですか。へたすると著者らに対する中傷になり兼ねません」

委員 C「谷川さんって火のないところに煙をたてるような人ですか？」

委員 D「おおげさな表現はあるけれど、『某氏ら』を傷つけるために書いた文章とも思えません」

担当委員「谷川さんは自分の投稿文を『某氏ら』に見せているようですよ。驚いた『某氏ら』が何とかしてくれと月報編集部に訴えてきました」

編集長「そうですね。困りましたね。長過ぎるということで最初の節を削ってもらいますか」

担当委員「タイトルもまともなものに変えてもらいましょう。『概観論文執筆のすすめ』とかに」

編集長「対応はおまかせします。」

担当委員「改訂要求のメールは『某氏』にも同時に送っておきます。これで安心するでしょう」

委員 D「第三者に情報を漏らすのはまずいですよ」

最初の節は修正のうえ、削られずに済んだ。

## 査 読

天文月報は査読雑誌ではありません、と現編集長は断言する。わたしが編集委員をしているときも査読ありとは思っていなかった。だが、「査読」ということばにどんな意味を感じるかは、人それぞれ微妙に違うようだ。

編集長「月報に査読を入れますか？」

委員 A「『査読付き』と宣言したって、公募人事のとき天文月報記事を査読付き論文として扱ってもらえないなら宣言する意味はないし、混乱を招くのではないかな」

編集長「いまわれわれがやっている作業は何なんですかね？ もちろん編集作業でしょうけれど、査読作業も入っていませんか」

委員 B「市販の雑誌の場合、査読しませんよね、編集委員が記事をチェックしているのですが、採用・不採用あるいは修正する・しないの基準は何でしょうか？」

委員 C「売れる・売れないの判断でしょうね」

委員 D「わかりやすいかどうか」

委員 E「われわれ編集者は人事公募のことまで考えなくていいと思います。雑誌の内容を良くすることを考えればいいんじゃないですか」

委員 F「多くの読者に面白くて間違いの少ない記事を読んでもらいたい。これが自然な要請か」

委員 E「記事の間違いを減らすには、記事の内容をよく理解できる人に読んでもらうのがいい。ある特定の記事をきちんと読める編集者がいるとは限らないから天文学会の適任の人に読んでもらう。これが査読制の原点でしょう」

委員 A「会員にとって天文月報が近くなる。査読者の役割が回ってくるからね。記事が集めやすくなるかな」

委員 B「査読内容も同一とは限らないね。Eureka 記事は原著論文に基づいた解説記事だから、日本語をチェックしてもらおう。Skylight、天球儀は、オリジナルな文章なので、内容のチェックも含めて近隣分野の研究者に査読してもらおう」

記事のチェックを編集委員以外にもお願いしたらという、おせっかいな提案である。

## 欄の盛衰

ここ 10 年の間に天文学に大きな変化があった。

褐色矮星の発見、銀河中心のブラックホール候補の発見、系外惑星の発見、CMB のゆらぎの説明、 $\gamma$ 線バーストの銀河系外起源確定などがあり、すばる望遠鏡の観測が始まった。天文月報の記事にはどんな変化があったのだろうか？ 欄の盛衰を調べた。

編集長「相変わらず投稿記事が少ないです。依頼記事 3 に対して投稿記事 1 です。各欄の記事数を 10 年前と比較してくれた委員、報告願います」

委員 A「2003 年 8 月号-2005 年 7 月号までを調べてきました。Skylight の記事は 9 本です。一方、持ち込みの『特集』は 15 本もあります。Eureka は 28 本ありますからほぼ毎号出ています」

編集長「10 年前はどうですか？」

委員 A「1993 年 8 月号-1995 年 7 月号までを調べてきました。Skylight は 22 本、特集は 1 本、Eureka は 23 本です」

編集長「特集が増えたことは喜ばしいですね。日本で行われる独自の研究がまとまったということですよ。Skylight 記事の数が減りましたね。依頼はしているのですけれどね。これについて何か解釈をお持ちの委員はいますか」

委員 B「宣伝が行き届いていないことを感じます」

委員 C「個別の論文を書くことに追われている」

委員 D「シニア研究者が会議で疲れている」

委員 E「市販の雑誌に書いてしまう」

委員 F「物理学会誌に書いてしまう」

編集長「うーむ。どれも解釈として決定的ではないですね。では、記事集めに良い策はないですか」

委員 G「D 論の季節に、レビューのしっかりした博士論文を見つけて書いてもらう」

委員 H「研究会で招待講演や分野概観の講演をした人に書いてもらう」

委員 I「天文学・物理学と他の分野との境界領域

の人に書いてもらう。そのために、われわれ編集委員が境界領域のことを知っている人と接触する必要がある」

編集長「ありがとうございます」

自分が書けばいいじゃないかと反省する。材料がないわけではない。天文月報に投稿することが全く思い浮かばなかった。編集委員をやめたら委

員の苦勞をすっかりわすれた。

編集の仕事は好きである。どこが好きかと言われても、うまく言えない。わが家で廊下の天井の蛍光灯を取り換えるのは妻で、足元で脚立をおさえるのがわたしである。映りが悪くなったテレビの裏側に顔を突っ込んであれこれ調べるのが妻で、道具を持って控えているのがわたしである。裏方の仕事が好きなんじゃないかな、と思う。

### 星空市場・編集部より

#### 【意見】「理科年表」への要望

国立天文台編纂「理科年表」は、信頼できるデータブックとして教科書にもしばしば表や数値が引用されている。ところで「理科年表」天文部の末尾には「天文学上の主な発明発見と業績」の表があるが、驚いたことにこれには1967年のパルサーの発見までしか載っていない。それ以後記載するに値する発見は皆無であったのか？ しかもX線星の発見者の一人が10年近く前から「ハオリニ」となっている。また1666～87年の項に「プリンキピア、万有引力」とあるが、「物理学上のおもな発明および発見」の表では、1687年の項に「運動の法則」「万有引力」とある。ニュートンは1666

年に万有引力の着想を得たが、完成は20年後であった。

「天文トピックス」の内容はたいへん有益であるが、こういう項目は他の分野にはない。これが他の分野の人々から天文の特権と見られてはしないかと気になる。やはりこの項目は止めて、データブックとしての性格に徹すべきだろう。そして浮いたページを天文学史年表の見直しと拡充に当てていただきたい。何しろ物理は8ページ、化学は5ページなのに天文は2ページしかないのだから。さもないと1851年フーコーによる地球自転の証明や、1946年ガモフのビックバン理論まで物理学史年表に「おまかせ」する状態が続くことになる。

佐藤明達（東京都）

### 編集部より

1993年8月号より編集委員が交代しました。前編集委員の努力により、天文月報の紙面は刷新され、読み易く、内容もかなり分かりやすくなったと思っています。

今期の委員は前期のこの編集方針を踏襲するつもりです。その際、原則として著者の原稿を尊重し、著者に無断で表現・内容を変更しません。そのために編集部とのやりとりが増え、著者の負担が増えるかもしれません。著者の意向を読者に正確に伝えるためには、このやりとりは必要なことと考えています。また前期に始まった**SKY-LIGHT**、**EUREKA**、**天球機**等の区分けを引継ぎます。

ただ、天文学会の財政が逼迫しているため、天文月報のページ数に厳しい制限が設けられまし

た。常設コーナーのいくつかをときに休載することになるかもしれません。広告収入の増大によってこれを回避しようと考えておりますが、相手のることなので、予断は許しません。

編集部は素人集団です。今風に言えば、ボランティアの集まりです。これから2年の間、実践しながら成長するつもりなので、会員諸氏のご協力をお願いします。

天文月報編集委員

☆

☆

☆

☆

編集委員 谷川清隆（編集長）、坂尾太郎、田代 信、中川貴雄、中村 士、濱部 勝、林左絵子、半田利弘
平成5年7月20日 発行人 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
印刷発行 印刷所 〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12 啓文堂 松本印刷
定価550円(本体534円) 発行所 〒181 東京都三鷹市大沢2-21-1国立天文台内 社団法人 日本天文学会
電話 (0422)31-1359 振替口座 東京 6-13595

編集長として初めて登場した紙面（1993年8月）。